『スヴャトスラフの文集』1073年-その文献学的特徴若干について-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2009-02-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩井, 憲幸 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/1276

『スヴャトスラフの文集』1073年

——その文献学的特徴若干について——

岩井憲幸

1. はじめに

『スヴャトスラフの文集』1073年（Изборник Святослава 1073 года. 以下Iと略称する）は，年紀を有するロシアの写本中第2番目に古いものである。その第1は『オストロミールの福音書』1056-57年（Остромирово евангелие 1056-57 г.），その第3は『スヴャトスラフの文集』1076年（Изборник Святослава 1076 г.），その第4は『アルハンゲリスク福音書』1092年（Архангельское евангелие 1092 г.）である。ついで第5として『ノーヴゴロド・ミネーヤ』1095・96・97年（Новгородские служебные минеи 1095-97 гг.）が続く。

Iは今日《Изборник》という名称で呼び慣らわされているが，写本の総題ともいうべき箇所では《СЪБОРЪ》の語が用いられている（後述）。今日Iの内容から考え，後世のslavonに用いられる《ИЗБОРЬNИКЪ》の語をそのまま現代語として用いて《Изборник》としているのだが，この語は《選文集》の謂いである。Iは聖典・教父文献・その他からの《選文集》である。はじめビザンティウムの《選文集》があり，これが10世紀の初め，ブルガリアにおいてシメオン帝（在位893～927年）の治世に，ギリシア語からスラヴ語に翻訳されたと考えられている。ただしともに原本は伝存しない。後者の写本のひとつがIである。Iはその跋に従えば，1073年にキエフにおいて大侯スヴャトスラフ（1027～1076年）のために製作された（後述）。すなわち東スラヴの写本である。

Iは1817年，モスクワ北西にある男子修道院 Воскресенский Ново-Иерсалимский монастырь において古文書学者 К. Ф. Калайдович（1792～

1832）と П. М. Строев（1796〜1876）によって発見された。この修道院は1656年に総主教 Никон によって礎を築かれた。ゆえにIも Никон の蔵書であったと考えられている。1834年，Iはモスクワの宗務院図書館（Московская Синодальная библиотека）の蔵となり，1917年以降モスクワの国立歴史博物館（Государственный Исторический музей）の蔵に帰し，現在に至っている。

Iは発見直後から盛んに研究の対象となった。1824年，Калайдович は早くもテクストの一部を公表している[1]。この写本の研究の基礎は，古書の蒐集家として著名な伯爵 Н. П. Румянцев（1754〜1826）の下にあった教会史家・文献学者の А. В. Горский（1812〜1875）と同じく文献学者 К. И. Невоструев（1815〜1872）によって1860年代に与えられた[2]。1880年，サンクト・ペテルブルクにおいて古代文学愛好者協会からIの石版複製版が刊行された[3]。直後の1883年，スラヴ学者 О. М. Бодянский（1808〜1877）は，テクストの一部分にギリシア語・ラテン語のパラレル・テクストを付して刊行した[4]。1899年，А. Розенфельд はワルシャワにおいてIの言語について完全な記述をなさんと試みた[5]。

1973年，Iの900年記念祭がレニングラードで開催され，その研究と出版に関してプロジェクトがうちだされた[6]。これをうけて，1978年〜1981年にIの修復がなされ，平行して写真による分析研究が実施された。修復後の1983年，Л. П. Жуковская を中心として写真複製版が刊行された[7]。さらに1991年〜1993年，ブルガリアで П. Динеков を中心にIによるシメオンの《選文集》に関する大きな研究書が刊行された[8]。ここにはテクストとその索引が含まれる。

研究史をここで略述したが，新しいものを除き残念ながら主たるテクスト・文献は入手困難であり，筆者には未見であることをことわっておかなければならない。

2. 研究の目的と底本

筆者らはここ数年間の研究において，『アルハンゲリスク福音書』における東スラヴ語的特徴の現れ方に，古代教会スラヴ語からその地方的変種への変容の初期状態と，同時に古代ロシア文語成立の第1段階を観察してきた[9]。今回は，年代は約20年遡るものの，『アルハンゲリスク福音書』が聖典であ

るのに対し，非聖典であるＩをとりあげ，その東スラヴ語的特徴に上記の段階を観察しようとするものである。

研究を開始するにあたり，Ｉの，ことに古文書学的事項と一般に知られている言語的特徴についてあらかじめ筆者なりにまとめかつ略述しておきたい。

なお，今回の研究においてもファクシミリ版を使用したい。幸い，上掲の如く Л. П. Жуковская を中心として次の版が刊行されており，筆者らもこれに依るものとする。

Изборник Святослава 1073 года; Факсимильное издание, Москва, 《Книга》, 1983.

本書には次のような解説が独立して別本として附されている。

Изборник Святослава 1073 года; Научный аппарат факсимильного издания, Москва, 《Книга》, 1983. [以下 Ž と略称]

これも上掲したが，次の書も活用する。

Симеонов сборник (по Светославовия препис от 1073 г.), т. 1–3, под общата редакция на акад. П. Динеков.; т.1 : Изследвания и текст, София, 1991; т. 2 : Речник-индекс, София, 1993.

本書は，当初全３巻の予定であったが，今日迄２巻のみが刊行されている。

3. 古文書学的事項

次に，これ迄の研究成果にのっとりファクシミリ版によって，古文書学的な事項を記述してゆく。ここでは主に Сводный каталог славяно-русских рукописных книг, хранящихся в СССР, Изд-во 《Наука》, М., 1984. (以下 K と略称)，さらに上記 Ž による。

Ｉは今日，ロシア国立歴史博物館に蔵される（Син. 1043 (Син. 31-д)）。羊皮紙による写本１冊。大きさ 33.6×24.8 cm。全 266 葉。ただし途中欠葉あり。またいくつかのミニアチュールを含む。

本文は毎半葉左右２欄，１欄 29 行。字体はウスタフ体を用いる。copyist は２人。第１の copyist の名は《диак》Иоанн，第２の copyist の名は不明である。前者 Иоанн がこの写本製作のリーダーと考えられるが，copyist 2 名の分担は次のようになっている。すなわちそれぞれの筆跡が次の箇所に認められる。(なお pagination については 3.3 を見よ。今現行のそれに従う。)

第１の copyist，《диак》Иоанн：4—86α[10] の 15 行半ば（原文

〈СТЬМИ・〉迄)，263γ の 23—29 行（跋文)，263δ の 1—2 後半部分，264α 25 行—266β；1v のミニアチュールの標題，4 および 129 の飾り内の文字，250v—251 の《十二宮》の各名称。

第 2 の copyist：86α 15 行半ば—264.（ただし 263γ 23—29 行跋文，263δの 1—2 後半部分，すなわち第 1 の copyist の部分を除く。)

なお，第 1 の copyist はさらに目次，第 1 綴[11] から第 12 綴初めにかけての章の番号付け，写本全体にわたりテクスト内・欄外における多数の訂正を行なっている。一方，第 2 の copyist は第 12 綴途中より第 35 綴迄の章の番号付けを行なっている。

3.1 加筆・訂正等

さらに，テクストに関し次のような後世の加筆および訂正が存在する。

① 127γ–δ：13 世紀の加筆。

② 8v, 10v, 11, 38, 122v, 237v–240v：15 世紀の加筆。

③ 254β：13 世紀の章題訂正加筆。

テクストに直接かかわらない書き込みには次のものがある[12]。

① 1：Кормчая［17 世紀の草書で，二度くりかえし書かれている。K によれば，修復の際とりはらわれた羊皮紙上に，14～15 世紀のテクストが 23 行あるという。

② 44v 左欄外たてに：I・Ж［K によれば 11 世紀のウスタフ体で。]

③ 122δ 章末飾り下に：Блговѣрнъıи ⁘ и хтолюбивъıи и свѧщенъıи ıєпъ ⁘ Диѡнисии・пєрвоє болшимь бъı должєнъ・што є［6 行。K によれば 12～13 世紀のウスタフ体で《болшимь》以下 γ 欄 14・15 行のテクストのくりかえし。]

④ 241 下欄底部：горе горе оухъ оухъ …［以下切断。全 1 行。K によれば 14 世紀末～15 世紀初めのウスタフ体で。]

⑤ 263v 上欄上端：покушавши чернила сего добро лѣ…［最後部分のみ複製本ではかろうじて認められる。全 1 行。K によれば 14 世紀末～15 世紀初めのウスタフ体で。…以下は切断されている。]

⑥ 265v 下欄，ニスで染まっている部分：…с…пса…［Фе]дора съ дѣтьм…［一部分とくに後半のみかろうじて認められる。後部切断あり。2 行。K によれば 12～13 世紀のウスタフ体で。]

⑦ 266 下欄，ニスで染まっている部分：тагалъса томидъ съ дѣвъко…

ѥсмы так… ат…ть год…до дмитрова д… [全3行。Kによれば12〜13世紀のウスタフ体で。なかば消されている。]

⑧ 266δ上方：ги по…м ги • помози рабу своѥ [2行。Kによれば14世紀末〜15世紀初めのウスタフ体で。]

⑨ 266δ下方：ги іс хс • сне бжи • помілу мѧ • грѣшьно… [全2行。Kによれば12〜13世紀のウスタフ体で。]

3.2 跋と成立年

263γの26〜29行に次のような第1のcopyistの跋があり，これによってIが1073年にスヴャトスラフ大侯のために書かれたことを示している[13]。

ВЪ ЛѢТО • ѯSФПА • NАПИСА IѡANNЪ ДИАКЪ ИЗБОРЬNИКЪ СЬ • ВЕЛИКОУОУМОУ КNАЗЮ СТОСЛАВОУ: — [[天地開闢暦の] 6581年 [＝西暦1073年] に《輔祭》イオアンが大侯スヴャトスラフにこの文集を書いた。]

3.3 欠葉と pagination

元来Iは1綴（тетрадь）各8葉からなり，全35綴であった。しかし今日，元来の第18綴が失われ，さらに他の部分でも欠葉を生じているとされる。また後代の修復等により，元来の位置から誤った位置に移動し綴られたこともあったが，今日では各々本来の位置に戻されかつ綴られている。ただし，今日versoにスヴャトスラフの家族像のミニアチュールを有する第1葉は，本来第1綴には属さなかったという。

実のところ，KとŽでは欠葉に関し1点小異を有するのだが[14]，内容を勘案し，ファクシミリ版に従って誌せば次のようになる。数字は現在の葉番号を示す。

① 4・5間で2葉欠。

② 7・8間，11・12間で各2葉，計4葉欠。

③ 127・128間で1葉欠。

④ 130・131間で1綴すなわち8葉欠。以上合計15葉欠。

このうち③はKに従ったが，これをŽは認めていない。Kは127 versoのテクストを13世紀ウスタフ体による書き足しとしているから（この点Žも同じ），13世紀テクストの続きの1葉が欠落しているのかもしれない。Žは後者すなわち13世紀テクストの続き1葉を，本来の葉ではないゆえに，

これを欠葉と誌さないのかも知れない。こうみてくると，Kに従えば，13世紀の葉も含めて，Iは全281葉であったということになる。一方，Žに従えば，Iは全280葉であった。筆者には，Iが全35綴であったとKは述べているから，1綴8葉として，全280葉となり，これにのち1葉が加わり，127 versoのテクストの続きが書かれていたが，さらにのちに脱落して失われた，と解すべきであろうか。なお上記①は第1綴内，②は第2綴内，③は第17綴内でのことであるとKはいう。

今日ではIの各葉recto右上隅に手書きによる葉番号が付されている。これはファクシミリ版でも容易に確認できる。だが，一部において3種あるいは2種と複数の葉番号を有する箇所が存在する。結論的には，複数の数字が示される場合，おおむねもっとも右上隅に書かれている葉番号が正しい（ただし複数書かれていても同じノンブルの場合は問題はない）。今日の第1葉が，本来の第1葉ではなかったことは上述したが，他の場合においても，本来の場所から誤った場所に移されていた葉がいくつか存在していたという。これが，1978～1981年の修復の折，正され，今日の形態におちついているという。葉の乱れは，第2綴と第3綴で，第16綴と第21綴において生じていたらしい。詳細は省略するが，次の表のように今は正されている。表下段が現在のノンブルであり，もっとも右上隅に付された番号である。

	第2綴				第3綴					第16綴				第21綴			
19Cのノンブル	9	10	11	12	14	15	16	8	13	149	150	151	152	118	119	120	121
現在のノンブル	8	9	10	11	12	13	14	15	16	118	119	120	121	149	150	151	152

3.4 装釘・料紙・ミニアチュール

Kに依れば，Iは1981年の修復時迄ビロードをはった板製の表紙を有していたという。修復時にこれがはずされ，新しい表紙につけかえられ，旧の板表紙は保存にまわされた。

料紙はすでに述べたように羊皮紙であるが，過去と1981年の修復時に紙も使用されている模様である。残念ながら，この点は複製本ではしかと認めることができないので，詳述できない。

Iのミニアチュールは，古代ロシア文化にとり大きな価値を有するという。

美術史的事柄はここでは言及できない。写本上の事項に限定する。ミニアチュールは次の2つ。

ⓐ 1v：大侯スヴャトスラフとその家族像

ⓑ 2：キリスト像

2図ともに金の顔料を用いる。ⓐには図の上に（ここには3行の文字あり。その第3行に）次のような各像の名前を金文字で標記する。

·∴ГЪЛѢБЪ·ОЛЬГЪ·ДАД·РѡМАNЪ·ЮАРОСЛАВЪ·КNАГЫNИ·СТОСЛА·∴ВЪ·

第3の名は〈ДАВИДЪ〉，第7の名は〈СВАТОСЛАВЪ〉の略である。第6は〈王妃〉の意。

ⓑは像の左右に次の〈イエス・キリスト〉を表わす朱の略字をもち，その外側にそれぞれ孔雀1羽計2羽を描く。

IC · XC

なお，ⓐを含む現在の第1葉は，Iの発見（1817年）直後本体から切り離されて，長らく別に保存されていたという。

ⓐⓑのミニアチュールに準ずるものとして次のものをあげうる。

ⓒ 2v：跋文を囲む飾り枠

ⓓ 3-3v：装飾扉

ⓔ 128-128v：同上

ⓕ 7：巻頭飾り

ⓖ 127：同上

これらはいずれもビザンティウム様式と認められるとされる。ⓒはcopyistによる跋文——その内容はスヴャトスラフへの讃——をとりかこむ二重の飾り枠で，枠内には円紋，枠外には孔雀や他の鳥が描かれる。金の顔料をふんだんに使う。なお金文字の跋文は2vのこの枠内で終わらず，2rのキリスト像上の3行に続いて終わる。ⓓはIの前半部分の扉ともいうべきもので，様式化された聖堂の断面図であり，堂中に一群の聖人たちが描かれる。3では前面に7人が描かれ，後に13人の頭が見える。3vは前面に7人，中段に7人，後方に5人。ここでも金の顔料が用いられ，ともに孔雀とその他の鳥が周囲に描かれている。ⓕはⓓに続く前半部本文冒頭の四角い飾り。上方に孔雀，脇と葉の下欄外に鳥と花を描く。ⓔは後半部分の扉である。やはり様式化された聖堂の断面図であり，塔上に十字架をもつ。128-128vでは一群の聖人が堂内に描かれる。128では前列7人，うしろに11人。128vでは前

列7人，後列5人。ⓓおよびⓔのこれらの聖人たちは，Iに掲載される文章の著者であるらしい。ⓔは128では鳥と兎，128vでは孔雀と鳥が堂の周囲に描かれる。ⓖはⓔに続く後半本文冒頭の四角い飾りである。その上方にライオン，脇に鳥を描く。下方欄外には人間を中心として，左右に兎と豹が描かれている。いずれも金の顔料をよく用いている。

ⓕとⓖに呼応するものとして，次の2つがある。すなわちⓗはⓕの章末飾り，ⓘⓙはⓖのそれである。

ⓗ　122δ：章末飾り（植物紋に二羽の鳥を配する）

ⓘ　263γ：同上（2羽の鳥を描く）

ⓙ　266β：同上（2頭の豹を描く）

次のものは欄外に描かれた十二宮図である。ここでは金の顔料を用いていないが，彩色されており，各宮名を表示する。

ⓚ　250v-251：十二宮図

他にⓛ62右欄外には天使か聖人の線描があり，ⓜ264左欄外に犬のような動物を描く（手彩）。ⓝ266下欄に2匹の豹か。朱の線描だが，消えかかっている。

大型の飾り文字は4と129各本文初めに存する。金の縁どりで，赤や緑で採色される。中型の飾り文字は主に金あるいは朱で縁どりされ，中の空間には色が施されない。小型の飾り文字は金あるいは朱で書かれる。

4. 内　　容

Iの内容は百科全書的である。教父たちの文献・聖典からの抜粋383の項目からなりたつ。その主たるものは聖人にして教会著述家シナイのアナスタシオス（Anastasios, ?～700年頃）の『問答集』である。いずれにせよキリスト教徒を神学・哲学・自然科学へと誘う書物となっている。

Iは上ですでに述べたように前後2部からなっており，それぞれ扉（上記ⓓⓔ）と巻頭の飾り（ⓕⓖ）を有する。そしてその飾りの内にそれぞれ次のような標題を含んでいるのである。［合字があるが単字に戻して引用する。］

4ⓕの中に全8行で：СЪБОРЪ ОТЪ МNОГЪ ОЦЬ • ТЪЛКОВАNИЮ • О NЄРАЗОУМЬNЫИХЪ СЛОВЄСЬХЪ • ВЪ ЄУАГГЄЛИИ И ВЪ АПЛѢ • И ВЪ ИNѢХЪ КNИГАХЪ • ВЪКРАТЪЦѢ СЪЛОЖЄNА • NА ПАМАТЬ • И NА ГОТОВЪ ОТЪВѢТЪ • ⋯ ∴ ГИ БЛГОСЛОВИ ОЧЄ: ～ ⋯［多く

の教父たちからの［ことばの］集成，［すなわち］記憶するためにまた答える準備のために簡潔に編まれた，福音書の中，アポストルの中，その他の書物の中における難解なことばについての解釈［の書］。［中略］父なる主よ，祝福をたれたまえ。］

後段2行は文字の消えている部分が多く，省略に従ったが，いずれにせよ，この標題はIの全体を示すいわば総題とみてよかろう。

ついで後半冒頭ⓖの内には次のようにある。

129ⓖの中に全6行で：ѲЄОДѡРИТОВО ОТЪ NЄРАЗОУМЬNЫИХЪ・ГИ БЛГОСЛОВИ ⁘ ОЧЄ ⁘［難解なことばのうちテオドレトス［の解釈］。父なる主よ，祝福をたれたまえ。］

この題は，ギリシアの教父にして司教かつ大神学者キュロスのテオドレトス（Theodoretos, ca. 393～466年）を代表としてとりあげることにより，後半部の標題としたものであろうか。

次に著者と内容につき詳細な目次を作成すべきであるが，多岐に亘るため，また紙幅を相当に費やすために別稿に譲りたい。ロシア語によるものは Ž に掲載されているので，今はこれに就かれんことを望む[15]。

5. 文字と言語の特徴

5.1 文字・字体

文字および字体に関して，とりたてて言うべきことはさほどないが，箇条書きにする[16]。

1) 文字として юсы は，Ѧ・ѩ および jota のついた Ѩ・ѭ が用いられる。さらに，jota のついた Ѣ が存在する。この音価については検討を要する。

   70γ10 СВОЄѢ ; 169δ21 ЄѢ

2) Ы は Ъ Ы および Ы の2字体を有する。

   139γ26 СЪINЪ ; 7γ18, СЫNЪ

3) Ѓ・Н̓ など右肩にカギを有する字体が存する（後述）。

   8γ25 ѦВЛѦЄТ СѦ ; 8γ28 ИСПЪЛN̓ѦѦ

4) 合字がわりあい頻繁に用いられる。

5) いわゆる spiritus は形と向きの上で何種類か認められるが，いずれにせよ母音に施されるものは無意，子音に施されるものは有意であり，

後者はおおくの場合 jers の省略を示す。

118α29 М҃NИТЬ СА ; 44α11 ЄМ҃ ; 120β12 РАЗЛИЧ҃NА

5.2 言語的な特徴

次のような rusizm がテクストに表われている。若干を掲げるのに留める。

音と綴りでは,

1) юсы の誤った表記。

43α21 І҃ѿNОША cf. 78δ29 ЮNОША ; 42γ7 ОУNОША

2) 語頭における OCS Ю-, Є- に対応するОУ-, О- の綴り。

137δ22 УГЪ cf. OCS ЮГЪ

203γ17 ОЖЄ cf. 2v22 ЄЖЄ

3) 共通スラヴ語の *dj に対し Ж, *tj に対し Ч で現われる。

99γ28 МЄЖ҃ cf. 137δ15 МЄЖДОУ

54β11 ТРЄПЄЧОУШТА cf. 34β11 ТРЄПЄШТОУШТААГО

4) 共通スラヴ語の子音間の流音 (r/l)+jers (ъ/ь) の結合, すなわち *trъ/rьt, *tlъ/lьt は, tъ/ьrt, tъ/ьlt と現われる。

31β27 СЪМЬРТЬ

32δ1 СЬРДЬЦЄ

60γ3 ВЪЛ'NОУ҃ШТЄЄ СА

形態では,

5) 動詞の 3 人称・単数／複数・現在が -ТЬ で終わる。(cf. OCS -ТЪ)

47δ22 ДѢЛАЮТЬ 106γ14 ДѢЛАІ҃ТЬ

6) *o-stem の名詞における単数・造格は -ЪМЬ/-ЬМЬ である。(cf. OCS -ОМЬ/-ЄМЬ)

94α20 АПЛЪМЬ 222β11-12 ОТЬЦЬМЬ

156δ13 СНЪМЬ ただし, 216γ14 СЫНОМЬ

7) *a-stem 等, 軟音変化における単数・生格, 複数・主格あるいは対格に -Ѣ の語尾が存在する[17]。

15δ17-18 ДА ЮДИNЫИ ОТЪ ТРОИЦѢ

70γ9-10 ВЬСЄГО СВОЄѢ

155δ10-11 РОДИ СА ОТЪ NЄѢ

169δ20-21 ВЪ ДОМОУ NЄ МЛЪЧИТЄ NОЗѢ ЮѢ

156β7 ПРИЮМЛА ДОУШѢ ЧЄЛОВѢЧЬСКЫ

8) 人称代名詞 ТОБѢ, СОБѢ の形が存する。cf. OCS 形 ТЄБѢ, СЄБѢ.

155δ1 ТОБѢ [生格]

181δ16 ТОБѢ [与格]

163δ19 ТОБѢ [処格]

22α18 СОБѢ [与格]

223δ27 СОБѢ [処格]

総じて，Ⅰのテクストは全体としては伝統的な OCS に依りながらも，部分部分で東スラヴ語化が進行したテクストであるとみられる。

6. むすびとして

先行の研究に従い，かつ複製本で跡づけられる点はこれをなぞりつつ，わたくしに『スヴャトスラフ文集』の文献学的特徴を若干記述した。今後はさらに細部にわたり，さらに数量的にも，古代ロシア文語の揺籃期の第 2 期を描かねばならない。その際，筆者らの先行研究である『アルハンゲリスク福音書』との比較は不可欠である。詳細は次の稿に譲るとしたい。

《注》

(1) К. Ф. Калайдович, Иоанн эксарх Болгарский: Исследование, объясняющее историю словенского языка и литературы IX и X столетий, М., 1824.

(2) А. В. Горский-К. И. Невоструев, Описание славянских рукописей Московской Синодальной (патриаршей) библиотеки, Т.5, Отд. 3,1. Книги богослужебные, М., 1869.

(3) Изборник Великого князя Святослава Ярославича 1073 г. иждивением С. Т. Морозова, Изд. ОЛДП, СПб., 1880.

(4) [О. М. Бодянский], Изборник Великого князя Святослава Ярославича 1073 г., с греческим и латинским текстами, с предисловием Б. В. Барсова и запискою А. Л. Дювернуа.: Чтения ОИДР, 1883, кн. 4.

(5) А. Розенфельд, Язык Святославова сборника 1073 г.: Русский филологический вестник, Варшава, 41, 1899.

(6) その成果の一部が書に纏められている：АН СССР, Изборник Святослава 1073 г., Изд-во《Наука》, М., 1977.

(7) 次節 2. 参照。

(8) 次節 2. 参照。

(9) 岩井憲幸・服部文昭『古代教会スラブ語の地方的変種から古代ロシア文語の萌芽にかかわる研究――「アルハンゲリスク福音書」を中心として――』(平成 7 年度～平成 9 年度科学研究費補助金（基盤研究(c)(2)）研究成果報告書),

平成 10 年 3 月；岩井憲幸・服部文昭『古代ロシア文語の萌芽期における特性の研究――「アルハンゲリスク福音書」を中心として――』(平成 10 年度～平成 13 年度科学研究費補助金（基盤研究(c)(2)）研究成果報告書，平成 14 年 3 月。

(10) 以下葉数等は次の記号で示す：v――verso, α――recto の第 1 欄，β――recto の第 2 欄，γ――verso の第 1 欄，δ――verso の第 2 欄。recto は必要のない限り記さない。したがって 86α は，第 86 葉のオモテの第 1 欄を示す。

(11) 古代ロシアの本も何葉かの羊皮紙をひとまとめにして一度綴じ（これを тетрадь という）た上，それらを重ねて 1 冊の本に装釘する。

(12) 以下の引用では，11 世紀のものは大文字で，12 世紀以下のものは小文字で引用する。なお原文はほとんど分かち書きされていないが，これを分かち書きし，母音文字上のいわゆるスピリタスの類は省略して引用する。

(13) I の本文の引用は大文字による。分かち書き・スピリタスの省略は上に同じ。

(14) K: op. cit. p.36 ; Ž: Научный аппарат. стр. 41-.

(15) Ž: Научный аппарат стр. 41-; Симеонов сборник: стр. 194-. なお，後世の関連写本との内容の比較については Симеонов сборник стр. 39- を見よ。

(16) この項については，次を参照せよ：Л. М. Костюхина-Э. В. Шульгина, 《Описание рукописи Изборника Святослава 1073 года》, Научный аппарат, стр. 61-; Симеонов сборник, стр. 102-.

(17) Симеонов Сборник., стр. 158 の例を引用した。

参考文献　＊注で述べたものは再掲しない。

A. 一般

1) Н. Н. Дурново, Введение в историю русского языка, Изд-во 《Наука》, М., 1969.

2) Л. П. Жуковская (ред.), Древнерусский литературный язык в его отношении к старославянскомоу, Изд-во 《Наука》, М., 1987.

3) A. P. Vlasto, A Linguistic History of Russia to the End of the Eighteenth Century, Clarendon Press, Oxford, 1988.

4) A. M. Schenker, The Dawn of Slavic ; An Introduction to Slavic Philology, Yale University Press, New Haven-London, 1995.

5) V. Kiparsky, Russische historische Grammatik, Band I., Carl Winter, Heidelberg, 1963.

6) D. Tschižewskij, Geschichte der altrussischen Literatur, Frankfurt am Main, 1948.

7) A. M. Селищев, Старославянский язык, М., 1952.

8) A. Vaillant, Manuel du vieux slave, tome I, Institut d'étude slaves, Paris, 1964.

9) 木村彰一，『古代教会スラヴ語入門』，白水社，1985.

B. 辞典等

1) Československá Akademie věd, Slovník jazyka staroslověnského, Academia, Praha, 1966-.

2) И. И. Срезневскій, Матеріалы для словаря древне-русскаго языка по письменнымъ памятникамъ, СПб., 1893. (rep.: Graz, 1971).
3) Fr. Miklosich, Lexicon palaeoslovenico-graeco-latium, Vindobonae, 1862-1865.
4) Ю. Н. Караулов (ред.), Русский язык; Энциклопедия, М., 1997.
5) Академия Наук СССР, Славяноведение в дореволюционной России; Биобиблиографический словарь, Изд-во《Наука》, М., 1979.
6) Р. М. Цейтлин и др., Старославянскій словарь (по рукописям X-XI веков), 《Русский язык》, М., 1994.
7) 『新カトリック大事典』Ⅰ-, 研究社, 1996-.

＊本稿は平成14年度～平成17年度文部科学省・日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究(c)(2)　課題番号14510607）による研究の成果の一部である。